

実際に、大事にあたって陰陽師の意見が対立し、片方が相手の意見内容の問題点を一喝して権力に非迎合な意見を通すことで、陰陽道が独自の権威をよく發揮し得たように見えた瞬間があった。福原遷都に関する方角禁忌が平家主導で議論された時のことである。

貴族社会のおおかたの気分が遷都に否定的である中で、陰陽道の一方の主役たる安倍泰親は、その雰囲気合致する形で「より正統な」専門的見解を出し、その光景は貴族たちに安心感と信頼感をもって受け取られた。他方で泰親の子の一人である季弘は、正当性においては劣るが強権に迎合する形の見解を出すというやり方で、道が決定に大きな役割を果たす道を選んだが、これは失敗に終わったのだった。季弘のちに「木曾祈師」であったとされて処分されているが、その時点での強権ではあっても貴族社会全体としては異端となる権力者に合わせようとする方向性は、陰陽道の信頼性や権威を高めることにはつながらなかったが、ここで明らかになったのである。平家や木曾義仲の一派が減んでも貴族社会は残り、結果的に陰陽道の権威を守って印象づけたのは、泰親の立場であった。

泰親はのちに後鳥羽天皇が皇位継承者に選ばれる時において後白河院の意向に添うなどの行動もしているから、権力迎合という側面が彼になかったわけではない。しかしそれ以上に、貴族社会の全体的な意向を読みとって満足させることを彼は重視したのである。強権者と貴族社会主流とが乖離した状況下で行われた福原遷都問題の議論こそは、そのことが成果としてはつきりと現れた場にほかならなかったといえよう。

泰親をはじめとする陰陽師たちのこうした判断を可能にしたのは、陰陽道が貴族社会をこそ支持の基盤とし、また彼ら自身も貴族社会の一員であるということをよく自覚していたという事実によるものであった。こうして、陰陽道は貴族社会の存続にとって不可欠なものと認識されたがゆえに、その宗教的権威をよく保つことができたのである。

協働表象（論）の基礎的考察

永岡 崇

本報告は、ある宗教伝統の中で伝承されている信仰的遺産（教祖、教典、教義、儀礼など）をめぐる表象に際して、異なる立場の人びとの間の相互依存関係によって生成する新たな宗教文化（＝協働表象 collaborative representation）の領域を浮き彫りにし、その意義を明らかにしようとするものである。

近代社会においては、信仰当事者ばかりでなく、宗教研究者、ジャーナリスト、文学者などの非信仰者も積極的に宗教をめぐる表象を行ってきた。それぞれの立場に応じて、信仰的遺産について語ることの目的や関心、信念は異なっている。だがその一方で、いずれの立場の者も、信仰当事者によって伝承されてきた諸テキストを読むことを通じて信仰的遺産に接近するしかなく、また他者の表象の影響を受けざるをえないという意味で、相互依存的な一種の共同性を形成しているとみることもできる。こうした共同性を、信仰的遺産をめぐる（読みの共同体）と呼ぼう。

テキストを読むという行為によって結びつけられる（読みの

共同体〉は、教団やアカデミズム、ジャーナリズム、文壇などといった個別の解釈共同体(スタンレイ・フィッシュ)間の対話を可能にすると同時に、対話を通じて各解釈共同体内の差異、多様性を可視化するような場として機能しうるだろう。

立場を異にした者どうしが、〈読みの共同体〉において互いの表象を突き合わせようとする協働表象は、各々の単独の立場からは到達しえない宗教文化の領域を生じさせるかもしれない。そもそも信仰的遺産は、原理上さまざまな解釈に対して開かれていくものであり、ある特定の作法に基づいた解釈は他の解釈の可能性をなにごとに排除・抑圧することによって成り立つばかりではない。だが、異なる立場の者どうしが接触・交渉することで、それまで自明視してきた排除や抑圧の正統性、ひいては自己の立場の存立基盤が根底的に問われることになる。そのように自己の立場を揺るがしかねない他者の表象を〈読みの共同体〉への呼びかけとして真摯に引き受け、違和感を抱えつつ、自らの立場から応答しようとするプロセスのなかに、協働表象の意義が現れてくるだろう。そこでは、部分的な合意形成によって、信仰や研究実践のあり方などに変容がもたらされることも考えられる。

しかし、異なった立場からの表象の出会い、一方的な教導の行為へと転化したり、感情的な反発に終始してしまったりすることも往々にしてある。目的・関心・信念を共有しない他者の声に耳を傾けることは、信仰的遺産の安定した表象を妨げるため、他者を自己の立場へと強引に同一化させようとするか、呼びかけに対する応答を拒絶することで自己同一性を守ろうと

するのである。

こうした対話の失敗という契機は、協働表象の困難さを示すものではあるが、その不可能性を意味するものとはいえない。というのも、協働表象はひとつの時間・空間に閉じられた実践ではなく、論理的には〈読みの共同体〉に参入しようとする者すべてに開かれた企てと考えられるからである。たとえば特定の討議の場においてはたんなるディスコミュニケーション、対話の失敗としてしか生起しなかった事態が、その討議の記録を事後論もしくは遡及的に検証し直そうとする分析者によって、新たな宗教文化の可能性として立ち現れることもある。そこにおいては、協働表象の現場における越えがたい差異の経験、戸惑いの経験、教導の暴力の経験といった否定的な契機が、新たな信仰の領域、新たな研究の視座を切り開いていく。その意味で、協働表象はつねに未完のプロジェクトとして有り続けるものだといえる。

自然悪概念の宗教哲学的再解釈は可能か？

佐藤 啓介

なぜ、この世界に自然災害が起こり、人々の生活や身体を襲うのか。こうした災害をめぐる「なぜ」の問いは、ユダヤ教やキリスト教においては、それが自然悪として捉えられ、神義論の名のもとで問われてきた。しかし、現代においては、地震や津波などの自然現象の起こるメカニズムとして、悪の原因は、自然科学的に徹底的に説明されている。そして、もはや、自然悪の存在理由を問うという姿勢そのものが、無意味な営為とし